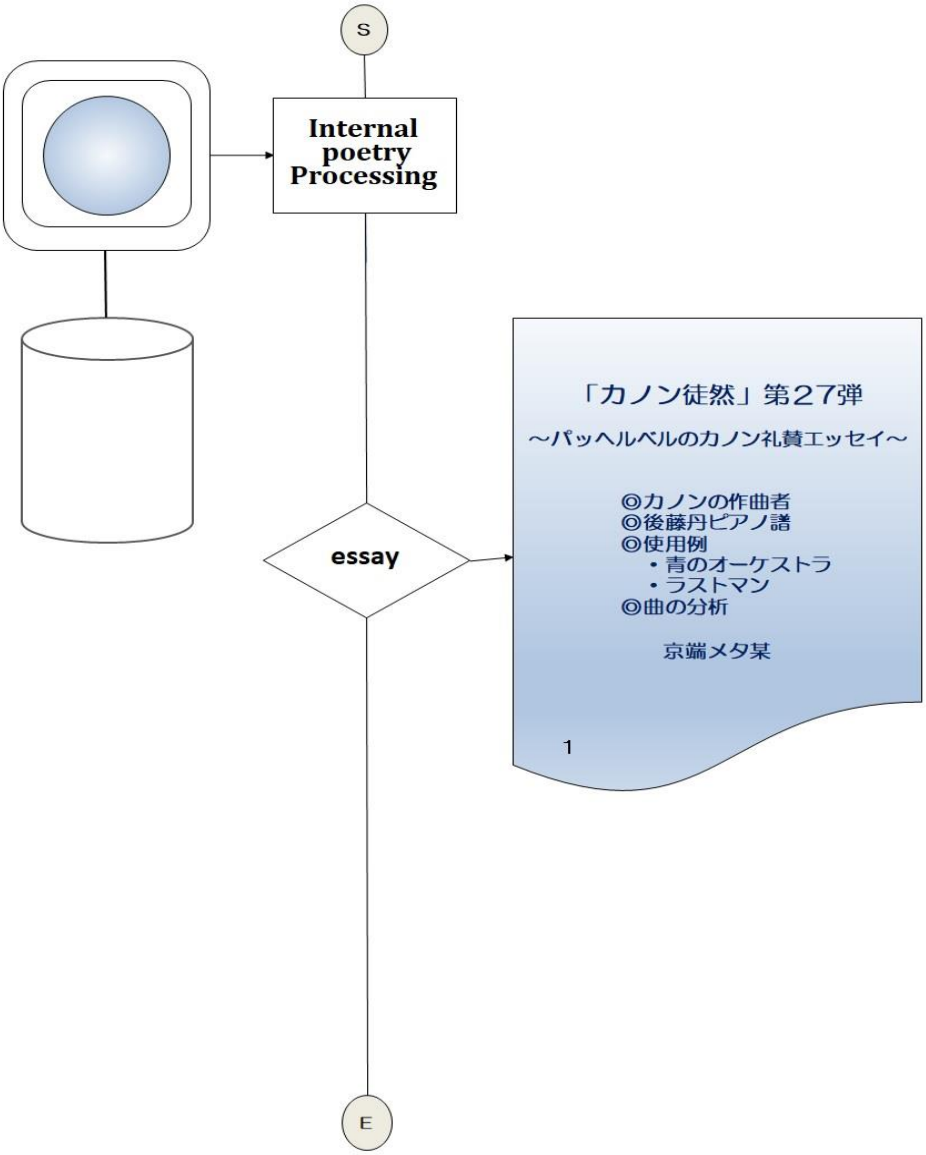
未来世界仕様書 Vol.27 Ver.1.0



未来世界仕様書

Vol.27 Ver.1.0

カノン徒然　第２７弾
～パッヘルベルのカノン　礼賛エッセイ～

京端メタ某

パッヘルベルのカノンを讃えるこのエッセイも２７回目となりました。これからも続けたい、独り輪唱！。

◇ カノンの作曲者

突然ですが、パッヘルベルのカノン、本当にパッヘルベルが作曲したのでしょうか。

礼賛、礼賛と言いながら、反旗を翻すようなこの言いぐさ、実は、以前から心に秘めていました。

だって、パッヘルベル直筆の楽譜がないのだもん。

パッヘルベルは１６５３年に生まれ、１７０６年に他界していますが、１７世紀後半から１８世紀前半の当時の書物にだって、いやそれ以後も、パッヘルベルのカノンは、パッヘルベルが作曲したと、証言・証明を残した人はいません。

疑ってみてもバチは当たらないでしょう。

そもそも、何故このカノンを、パッヘルベルのカノンと言うのでしょうか。

それは、いつか誰かがどこかで書き写した楽譜（カノンとジグのセット＋２曲）が１９世紀に発見されているからです。

（参照：Wikipedia パッヘルベルのカノン）

その写譜に、作曲者はパッヘルベルと記してありました。場所はドイツ。詳しい経緯は知りませんが、２か所で発見されたそうです。でも、ひとつは第二次大戦で焼失したそう。

つまり、写譜でしかないのです。疑ってみれば、原譜をコピーしたとは限らず、コピーのコピーのコピーの…という可能性もあり、伝言ゲームよろしく、どこかで、見間違い、記述ミスが発生した可能性があると考えるのは自然なことでしょう。

しかも、発見年から言えば、パッヘルベルの死後１００年～２００年の時間が経っています。別のどこかのだれかの作曲ではないのだろうか、とつい心配妄想してしまうのです。

いや、独立する２件の写譜の存在は、正しい確率をぐんと上げるのか。いや、ひねくれものは、この２つの写譜のコピー元が同じで、すでに作曲者を間違って写していた可能性も捨てられません。

そして、疑いを持つもうひとつの理由があります。パッヘルベルのあまたある曲の中で、何故これだけが超有名なのかということです。

パッヘルベルは、当時、著名なオルガニストであり、多数のオルガン曲、そしてそれなりの数の弦楽を作曲しました。しかし、今となっては、よっぽどのバロック好きでもなければ、パッヘルベルのオルガン曲や弦楽曲など、聞いたことはないでしょう。

もちろん、筆者はパッヘルベルのカノンを知るためにそれらを聞いたのですが、もっとも聴きつくしたわけではないですが、京端の耳に、カノンほど響いてくるものはなく、ひとつ

くらい何か共通の感動を感じる曲があってもいいのではないかと、それが疑問の種になってしまったのです。

パッヘルベルのカノンは、ドリカム（何故ここでドリカムかといえばこの例しか思いつかないから、そして事実に即した例えかどうかも保証できない）の「ラブラブラブ」なのでしょうか。それだけ残るという意味ではありません。ドリカムを聞かぬ人も、老若男女、万人に人気があったことに共通点を感じたのです。また、一発屋という言葉があることを考えれば、よくある話と納得したくも…やはり疑念は残り、

いやいや、世間に知られていないだけで、学術的にいろいろな角度でパッヘルベル作曲であることが、検証されているかもしれません。

例えば、紙やインクの年代測定をしているかもしれません。写譜は、パッヘルベルの生きていたころ、あるいは、そう時代を経ていないと分かっているのかもしれません。あるいは、写譜にある他２曲を含め、パッヘルベル自筆曲や証明曲との比較により、共通点を認めているかもしれません。

そういった科学的検証に基づいて、パッヘルベル作曲と言い切ってよいレベルに達しているのでしょうか。そうならかなりスッキリします。

それでも、京端は、この目で、パッヘルベルがいつどこでどんなふうに何を目的に曲を書いたのか、タイムマシンにのっていって、見てみたいです。

◇ 後藤丹ピアノ譜

さて、バイオリン３本とチェロで構成され、少なくとも４人いないと弾けないこの曲も、後藤丹氏のピアノアレンジなら、ひとりで弾けてしまいます。

全音のピアノピースＮｏ４４８

解説には、「３声のカノンと低音のオスティナートによる枠組みを完全に保持することを心掛けました」とあります。

ほんとに？どうやって？と思い京端は、このピアノ譜を原曲（発見譜相当）とをひと音ずつ逐次照らし合わせてみました。

楽譜は６ページ。それをコピーして、通奏低音は黒鉛筆で、第一声は赤、第二声は黄色、第３声は青の色鉛筆を使って色分けしました。

枠組みとは何か。３つの声部にそれぞれ省略がないことと、通奏低音が抜けなく２８回繰り返されていることと考えて間違いはないと思います。

結論。ちゃんと保持されています。

ただし、ひとりピアノ演奏という制限の中で、枠組みを保持するためには、原譜と異なるところは多々あります。

まず、音の高さ。例えば、ドであれば、しばしオクターブ上とか下のドに移されております。また、ドとドで重奏しているところも。この違いはいたるところで見られます。また最後の数小節は重音ですごくゴージャスになっています。

また、通奏低音の音符の長さが短いところがあります。前が切れていたり、後ろが切れていたり。

ふたつの手を使って４役をひとりで弾くためには、音の高さの移行などは、許容しなければならないでしょう。逆に、それだけでよくここまで、原曲に忠実にできたと感心します。

原曲との違いには、もしかしたら、違いとしてとらえるよりも、拡充された通奏低音ととらえた方がいい部分もあるかもしれません。

というのも、バロック音楽では、上声部の装飾や、通奏低音楽器の追加はお約束事です。ただ楽器を追加するだけでなく、ここでいえばチェロのレラシファソレソラを基本にして厚みや魅力を増す演奏をするのです。気の利いたアレンジをすれば賞賛の的です。

原譜には通奏低音楽器としてチェロしか載っていませんが、実際には、暗黙のうちに、チェンバロなども入って、通奏低音を、音楽理論にしたがった即興（いくらかは前もって作ってあったのかもしれませんが）するものなのです。写譜を元にチェンバロが追加されたザイツエルト譜に例を見ることができます。

前段で枠組みは保持されていると書きました。

ただし、４音だけ原曲と異なる音運びを見つけました。唯一そこだけなのですが、理由が分かりません。

３８小節最後の第１声の４音です。

原譜はラファソラですが、後藤編ではラレドレとなっています。４小節遅れ、８小節遅れで演奏する第２声（４２小節）と第３声（４６小節）は、原曲と同じラファソラです。

ラレドレでもハーモニーとしての違和感はないのですが、何故ここだけ原譜と違うのでしょうか。

ちなみに、第１声がラファソラのとき、第２第３声はどちらも右手の長い音で、ファとレを押さえているだけです。右手の難易度とし）ては、ラレドレもラファソラも、同じに思えます。

単純に間違いでしょうか？

それとも意図があるのでしょうか？

実は、ジョージウインストンの編曲（ハ長調）でも、原曲とことなる同様の音運びがあったりするのですが、音楽的に、ラファソラとラレドレは同型なのでしょうか。いつか理由が分かればと思います。

他に、枠組みとは関係ないと思いますが、拍子が違います。原曲は４分の４拍子。編曲では、２分の２に変わり、かつ、１音の長さが倍化しています。よって小節数も倍化しています。

原曲は１小節に４分音符４つの「強弱中弱」の拍子、編曲は２分音符が２個の「強弱」の拍子。原曲の１小節は、編曲後の２小節分になるので、２小節合わせたものは「強弱強弱」となります。

原曲とは３つ目の音の強さが違います。「中」だったものが「強」となります。現代の演奏で、曲の感じが変わるかどうかは、素人の筆者にはよくわかりません。

ただ、考えてみるに、原譜のパート譜には、最大２８個の音符（ほぼ３２分音符）が１小節に並ぶ所があるのですが、４パートを独り引き弾きするこのピアノ譜では、音符６４個以上

（４＋２８×２＋４以上）を１小節に詰め込むこととなり、楽譜が、ごちゃごちゃして、かなり見づらそうです。だから、３２分音符の横３本線を２本線になるよう工夫して、少しでもスペースを空けたということかもしれません。

でも、それなら２分の４拍子として、３２分音符を１６分音符化すれば、横線２本に減るのでは？　と、いろいろ下手な考えをめぐらしてみるのですが、そのへん詳しい方教えてください。

それはともかく。

原曲忠実を工夫するだけでなく、曲への解釈を積極的に行って、編者解釈の色づけをも果たしたとも思いました。

物語性（あるいは物語想起性）が高まったと感じました。枠組み保持が第一の目的と言っても、音の移動先や重ねる音を、高いところにもっていくか、低いところかによっても、異なる効果が生まれます。

ところで、パッヘルベルのカノンには、中世に端を発し音の幾何と言ってもいいカノン形式が使われ、また、バロックの特徴である通奏低音にオスティナートという繰り返し（その音階は、フェリペ２世時代にもさかのぼるチャッコーナの４拍子化と京端は理解）を使っています。「白鳥の湖」とか「シェヘラザード」を音を使って描くような具象的な、ある意味自由な曲ではなく、制約の中に組み立てられている抽象的な曲と言えるでしょう。

しかし、そのことがかえって人々の心に何かを想起させる力になっていると思います。例えば、掛け軸に「〇」が描いてある。あなたは何を想像するでしょうか。天を指す指の彫刻。どう思いますか？さらに、俳句では、５７５の１７音と季語で、読み手の解釈を立ち上げるといいます。そういうことと似ていると感じます。

ただ。バロック期初期にオペラが出現しており、それ以前の時代にも具体的なタイトルを持つ曲はあったので、バロック中後期のパッヘルベルの時代、ハイソサエティ層の音楽家の作曲手法にも具象表現を取り込んでいたことは想像できます。教会のオルガニストも神の摂理やその周辺ばかりを音楽にしていたかどうか。

ということで、パッヘルベルも、カノンに何か具象的なテーマを込めていたのかもしれません。例えば「アゲハ蝶３頭」「宮殿の夜明け」とか。それは、今となっては、わかりませんが、ただ、通奏低音がチャッコーナ由来とすれば、猥雑と言われたチャッコーナ、カノンのメロディーには、世俗的要素や具象表現を入れていることは考えられます。ただし、曲の形式は、オスティナート上の同度３声のカノン。神の秩序も同時に存在。と考えたいと思います。

さて、この編曲に、編曲者が解釈した物語が入ったのか、物語ではなく想起させる力が強まったのかは、難しいところですが、京端のイメージしたことをちょっと書いてみます。

出だしの通奏低音（レラシファソレソラ）は、レ（D3）が一オクターブ下のレと重ねられています。より低音が響き、地

深くの振動のよう。地球ならコアかマントル。宇宙の源である振動を連想します。

深くにある何かに降りタッチして目覚めを促しているようにも感じられます。これは自分が自分にタッチしているようでもあり…。

通奏低音２回目には、上声部第１声がファ（F5）ミレドシラシドと入ってきます。オクターブ下の同音と２重になっています。下降音なので、こちらは天から降りてくる感じです。

地球の地熱と、宇宙から降りそそぐ粒子が合わさって、創生期の海に発現していた。細胞がひとつ。と想像が膨らみました。

１０小節目では、左手の２重音の中の下音が外れ、単音になります。この変化は、補助輪が外れた自転車のようであり、上陸した魚類のようであり、つかまり立った人間の子のようです。つまり、新しいフェーズへの一歩。

１３小節目から物語が始まります。全体として上って下るなかに緩急がある。以下はしょります。

３７小節からの３２音符は若さとか青春。

６０小節目からは円熟のハイライト。

８５小節目から、また２重音の通奏低音が出てきて、回帰的な感じ。

最後は右手も左手も重奏重奏でクライマックス。永遠に突入していく。

つまり、発生、揺籃、自立、成熟、謳歌からさまざまなフェーズ、残り火が爆ぜつつも来たる終焉。摂理の下（摂理は淡々と通奏低音が表す）、という感じです。

個人史、人類史、生命史、宇宙史、に通じる普遍性を感じました。

自分でピアノを弾くと振動を体感し、曲を耳から聞くのとは別の経験ができます。聞くのと演奏するのでは違うものです。身体を使って音に浴する。記憶や琴線がいい具合に刺激されイメージも出てきやすい。そのこと

も記しておくべきですね。

◇　使用例

恒例の使用例です

【青のオーケストラ】

阿久井真のマンガを元にしたアニメ作品。２０２３年春。ＥテレＥ　萩森英明氏の編曲。

いったんバイオリンを断念した男子と、カノンを弾きたい初心者の女子が登場。ある高校のオケ部を目指すところから話が始まります。９話までチェック。

カノンは１話２話のモチーフです。ピアノの上にカノンの楽譜があったり、ヒロインの動機として使っています。曲の演奏は２話の最後。空が茜色の時刻に川っぺりにてヒロインの横で主人公が独奏します（＊）。きれいな音色。映像はオレンジ一色。

さて、この場面、エヴァンゲリオン「デスアンドリバース」はデスのエンディング（＊）を思い出してしまいました。そういえば、ヒロインのキャラは、アスカとかぶるような。オマージュでしょうか？…アニメのストーリーはまったく違いますが、思春期成長もの、学園、という面での共通点があり、そういえば、父親と確執ある主人公という点も一緒ですねえ。

パッヘルベルのカノンには何か思い入れがあるのかもしれません。番組エンディング主題歌としてもカノンが使われていました（＊）。

・夕さりのカノン　feat.「ユイカ」

作詞・作曲：粗品　編曲：syadou　歌：「ユイカ」

＊印の曲は京端サイトの第２７弾関連曲に入れました。

公式サイトによれば、１１月後半にＥテレで放送があるそうです。アニメ『青のオーケストラ』公式（aooke-anime.com）

【ラストマン-全盲の捜査官】-

２０２３年４月から６月のＴＢＳ系日曜日のテレビドラマ。主演は福山雅治。

カノンが入るのは、第５話（５月２１日放送）と最終回（６月２５日放送）

第５話では、ラストシーンに流れます。子供のころの母との連弾を思い出しながら、泊まっているスイートルームのピアノ（SHIGERU KAWAI ：カワイの最高級グランドピアノ）を主役が、ポロポロ弾く。

最終回では、四十数年前の事件の真相（どうして主役の両親は亡くなり、家は火事で焼けたのか）の映像と重ねています。時間にして４分足らずでしょうか。

パッパラパラパラ（１９小節から４小節）とタンタタタンタン（３５小節から４小節）を中心に、カットや編曲をして全曲の半分くらいを使っています。音と映像がみごとに合っているので京端は感動しました。

後に、このエッセイの別の話題で、譜面や表が出てくるのですが、ここで参照して、演奏箇所の推移を説明します。表１をご覧ください。アレンジがあるのはともかく演奏セット１から始まります。おそらくその前半です。続いて、演奏セット２の前半、（以下番号のみ）３の前半から５（パッパラパラパラ）に入りフル演奏ののち、９（タンタタタンタン）に飛びほぼフル演奏して、１１後半、１３前半、１４から、再び５と９（セット１２と重ねているよう）へ飛び、繰り返されます。セット５とセット９メインにしています。

ちなみに、パッパラパラパラの演奏セット５は、ほぼ全部３２分音符で構成される曲の最速セットです。そして、大変よく引用される（例：山下達郎クリスマスイブ、電話の待ち受け、パナップのＣＭなどなど）あちこちで耳にするパッパッラパラパラ…です。若さ、希望、明るさを感じます。なぜそう感じるのか。スピード感と弾む感じの中にも、ラファソラファソとか、ファミファミなどの繰り返しが、「いいのかな？」という

ためらいに通じ、若さ未熟さを感じさせるのでしょう。

しかし、今回、京端は、３５小節からの４小節（演奏セット９）を取り上げて、絶賛したいと思います。カノンの胆は、実は（演奏セット５ではなく）ここまで思えてきました。それは、前述の後藤丹編ピアノを練習し響きを体感するなかで感じてきており、ドラマ「ラストマン」で強まりました。

この箇所は、主に１６分音符で構成され、曲の中では、ハイスピードの部分です。曲を通じての最速音符は３２分音符ですが、これが一部に入り、タンタタタンタンの繰り返しになります。一オクターブ級の跳躍とともに、アップダウンが１拍毎に繰り返されます。前演奏セットの８では、同音が続く「着実に」と形容できるような高揚に進んで行くのに対し、セット９は、突然、心臓の鼓動を早めるでき事が何か起こったかのようです。音の上り下りと、跳躍距離の変化が、紆余曲折の心理や出来事を感じさせます。そして、それは反復する低音上で起こっていることでもある。

ラストマンのカノンは、輪唱形式を完全には保持していないと思いますが（京端の耳で聞くと）、それでも感動的な音運びでした。

仮に３声の音の重なりがあるなら、第１声が演奏セット９の前半２小節を演奏するとき、他の２つの声部は、演奏セット８の後半と前半です。先にも書いたのですが、演奏セット８の前半は、同音の繰り返しが多く平穏な感じから始まり、後半は、着実に盛り上がり、最後に一機に下がります。（この変化は第１声すでに体験している）演奏セット８は、すべて１６分音符です。３声ではその３つの部分が重なります。

その後、第１声は演奏セット９の後半、そしてスローな８小節である演奏セット１０に入り、２、３声もそれぞれ２小節遅れで先行音を繰り返して進みます。

そうやって３つの声部が合わさり続いていくと、複数の事柄が、それぞれある種の調和と必然性をもって、同時進行しているような感じがします。

もちろん構造上、全曲通じてそのような効果を持ちうるのですが、演奏セット９は、その中でもひときわドラマ性を放つ印象的なところと感じました。

先に、ラストマンのこの場面のカノンに輪唱構造は保持されていないようだと書きました。音楽のドラマ感が薄められていることになるのですが、考えてみるに、この場面では、映像とセリフが、他の声部に当たるのかもしれません。音楽で、真相の錯綜感・輻輳感を表し、カノン的重合効果を発揮しドラマを盛り上げている。そう考えると、京端の感動をうまく説明できるかもしれないと思いました。

さて、何度も言うように、このドラマでは、パッヘルベルのカノンが非常に効果を発揮していると感じたので、全曲を聞きたいと市販品を探しました。しかし、番組のオリジナルサウンドトラックには、アマゾンでサワリを聞いているだけなので言い切れないものの…、入っていないようです。

ＮＨＫのドラマ「ブシメシ」のカノンもそうでしたが、劇中

に使われているのに、なぜだか表に名前の現れない曲があるように思います。そういうことってあるのでしょうか。詳しい方教えてください。

探索の中で、出演者によるカノンの連弾が局のサイト（X）にあるのを見つけました。（https://t.co/dQr0jNIIdl）また、２７弾関連動画の説明にＵＲＬを貼りました。

◇　曲の分析

原曲を今少し分析してみました。着目は、出だしと終わりの音の上げ下げです。表にしたのでご覧ください。

曲は５７小節で構成されていますが、冒頭２小節は通奏低音のみ、最後の１小節はまとめの終了音のみです。残りの５４小節は、音符の見た目から４小節毎にグルーピングしました。数えると１４個。

このひとつひとつを演奏セットと名前をつけました。演奏セットの１から１１、１３，１４は、４小節で構成されます。ただし、演奏セット１２だけは２小節です。（なぜここだけ２小節なのか、その理由は聞かないでください）。そして、１２以外のセットは、前半と後半の半セットに分けました。

調査箇所は、半セット（セット前半あるいはセット後半）とセット１２の出だしの２音と最後の２音です。２小節毎の最初と最後の２音とも言えます。

なぜひとセットの出だしと最後ではいけないのか。

実際の演奏を考えると半セットが有効に思えたのです。なぜなら、パート演奏が２小節ずれて始まるからです。

実際の演奏は、３つのパートとも、ひとつの同じメロディーを演奏します。ただし２小節ずらして。その３つのパート演奏の音の重なりに、どんな特徴があるのかも、合わせて確認したいと考えたのです。

具体的に演奏を言えば、通奏低音のチェロが２小節演奏したあと、第１バイオリンが入ります。第１バイオリンが２小節演奏した後、第２バイオリンが同じメロディを冒頭から演奏し始めます。第２バイオリンが２小節演奏した後、第３バオリンが同様に入ります。

つまり６小節目で、４つのパートが演奏している状態になり、うち３台のバイオリンは同じメロディーを時間差で演奏している、それが、曲の終了まで続きます。通奏低音はオスティナートという繰り返しになっているので、チェロは２８回ずっと同じレラシファソレソラを繰り返します。

表１も使って言い換えれば、演奏順 No1 の行で表すチェロの通奏低音で始まり、２回目の通奏に演奏順 No2（第１バイオリン）が重なります。

３回目の通奏に重なるのは、演奏順 No2（第２バイオリン）と No,3（第１バイオリン）となり、４回目の通奏で、No2（第３バイオリン）、No,3（第２バイオリン）、No４（第１バイオリン）が重なります。

５回目の通奏には No3,4,5 が重なります。以降同様に、バ

イオリンの演奏では三行が重なり、通奏回数毎に一行ずつ下へスライドしていきます。

２８回目の通奏の後、終了小節で終わります。終了は特別な音ではなく、次の小節の冒頭の音です。

くどくど書きましたが、要は２小節毎に縦に並べると３パートの音の重なりの特徴が見やすい！

半セットの出だしと最後の音については、２音のみチェックしました。拍の位置は無視しています。上りか下りを調べ、どの程度落差があるのかを数値で記述しました。

例えば「差」欄の２は隣の音に移ったということです。ドから上りならレ、下りならシです。８はいちオクターブ異なる同音です。

結果の表は、ぱっとみても興味深いです。

通奏低音は、下げて上がる繰り返しですが、その上に乗る声部の上げ下げは、場所により、かたよっています。

例えば、出だし２音の欄をみれば、最初は下げが中心となり、後半は上げ調子に変わり、最後にまた下げになります。しかも、後半は一オクターブの跳躍が多い。

また、最後２音の欄を見ると、前半は下げ、後半で上げが多くなる。そのあとは同音が続くという具合です。

半セットの出だしと最後は、通奏低音の冒頭と終端にあたります。また、半セット２小節は、パート演奏のずれの単位に当たります。そして、前半出だしと後半最後は、演奏セットというモチーフの変わり目に当たります。おそらく人の耳は、音楽の区切りを検知していると思うので、区切りでの音の変化が耳に残す印象は強いはずです。つまり、聞く人の心へ何某か効果が生まれていると思います。

先に、若さを感じると書いた部分は、演奏セット５です。この前後は、出だし２音が下げ、最後２音が上げ調子になっていることを見ると、やっぱり心への効果があるのだと思います。

また錯綜輻輳と合うと書いた演奏セット９では、この前後は、同音、上下が取り混ざって演奏されています。やはり、心への効果があるのだと思います。

今回は、とりあえず、表を作成してみたという報告でしかないですが、これから色々見てみたいと思います。表のレベルアップも含めて。なんせ、シメキリ直前に思いついて、面白そうとはじめたトッカン作業なのでゆっくり眺める時間がなかった〜

以前、単純から複雑、低速から高速に変化する変奏と筆者は、単純かつ興奮気味に言っていましたが、今は、いったいどこに目をつけていたのだろうと、我ながらあきれます。

でも、徒然を書き出してから１０年過ぎて、いろいろ発見できるのも楽しいものです。終

最後までおつきあいいただきまして、ありがとうございました。

YouTube のメタ何某チャンネル　よろしく
第２７弾関連動画（再生リスト）ご参照ください
・後藤丹編ピアノ演奏　演奏者：737guam 氏
・青のオーケストラ２話
・粗品―夕さりのカノン feat.『ユイカ』
・エヴァンゲリオン　デスアンドリバース　カノン

X

・ラストマン
主役演奏動画関連：https://t.co/dQrOjNIldl

参照サイト
・Wikipedia パッヘルベルのカノン　およびリンク
・青のオーケストラ

参照楽譜
・全音ピアノピース　Ｎｏ．４４８　ＫＡＮＯＮ
・George Winston PIANO SOLOS
「VARIATION ON THE KANON BY PACHELBEl」

パッヘルベルのカノン　演奏セットの出だし２音と最後２音の方向

演奏順 No	小節数	演奏セット No		中心音符	最速音符	出だし２音 向	出だし２音 差	出だし２音 音	最後２音 向	最後２音 差	最後２音 音	演奏の詳細
1	2	0	-	4	4	下	2	レラ	上	2	ソラ	通奏低音のみ （注：通奏低音はNo28まで必ず演奏する）
2	2	1	前半	4	4	下	2	フアミ	上	2	シド	No２（第１声）のみ
3	2		後半	4	4	下	2	レド	下	3	ソミ	No.２（第２声）とNo.３（第１声）
4	2	2	前半	8	8	上	3	レファ	下	2	ラソ	No.２（第３声）とNo.３（２）とNo.４（１）
5	2		後半	8	16	下	3	ファレ	下	2	レド	３（３声）と４（２声）と５（１声）：No.省略
6	2	3	前半	16	16	下	2	レド	下	2	ファミ	４（３声）と５（２声）と６（１声）：No.省略
7	2		後半	16	16	上	2	レミ	下	2	ラソ	以下同様
8	2	4	前半	4	8	上	8	ファファ	上	2	シド	
9	2		後半	m	8	下	8	レレ	上	4	ミラ	
10	2	5	前半	32	32	下	3	ラファ	上	2	ソラ	
11	2		後半	32	32	下	3	ファレ	上	2	シド	
12	2	6	前半	8	8	下	2	レド	上	2	レミ	
13	2		後半	8	8	同	2	ラ	上	6	ソミ	
14	2	7	前半	16	16	下	8	ファファ	上	2	シド	
15	2		後半	16	16	上	8	レレ	上	2	ソラ	
16	2	8	前半	16	16	上	3	ファラ	下	3	ミド	
17	2		後半	16	16	上	6	ラファ	同	0	ド	
18	2	9	前半	16	32	下	8	レレ	下	2	ファミ	
19	2		後半	16	32	上	6	ファレ	同	0	ラ	
20	2	10	前半	m	8	同	0	ラ	下	2	レド	
21	2		後半	m	16	上	8	レレ	同	0	ミ	
22	2	11	前半	16	16	上	8	ファファ	同	0	ラ	
23	2		後半	16	16	上	8	ララ	同	0	ド＃	
24	2	12	-	4	16	同	0	レ	同	0	ミ	
25	2	13	前半	4	8	上	8	ファファ	下	2	シラ	
26	2		後半	m	16	下	8	ララ	下	2	レド	
27	2	14	前半	8	8	下	8	レレ	上	8	ミミ	
28	2		後半	8	16	下	8	ファファ	同	0	ラ	26(３声）と27（２声）と28（１声）
29	1	15	-	4	4			ラ			休符	終了　1レ（通奏低音）と (27レ（３声）と28ファ（２声）と29ラ（１声）)

m：　混合

表１

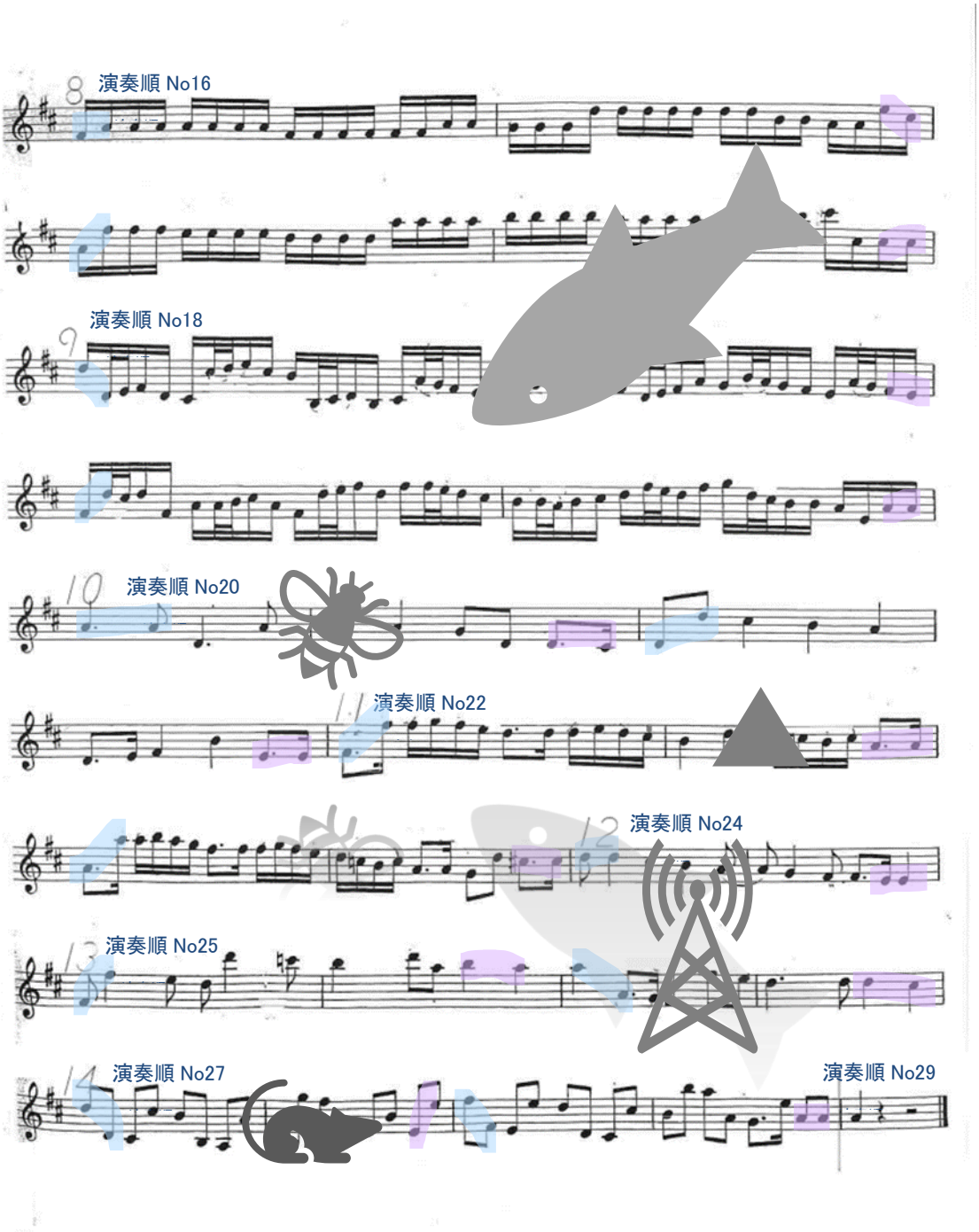
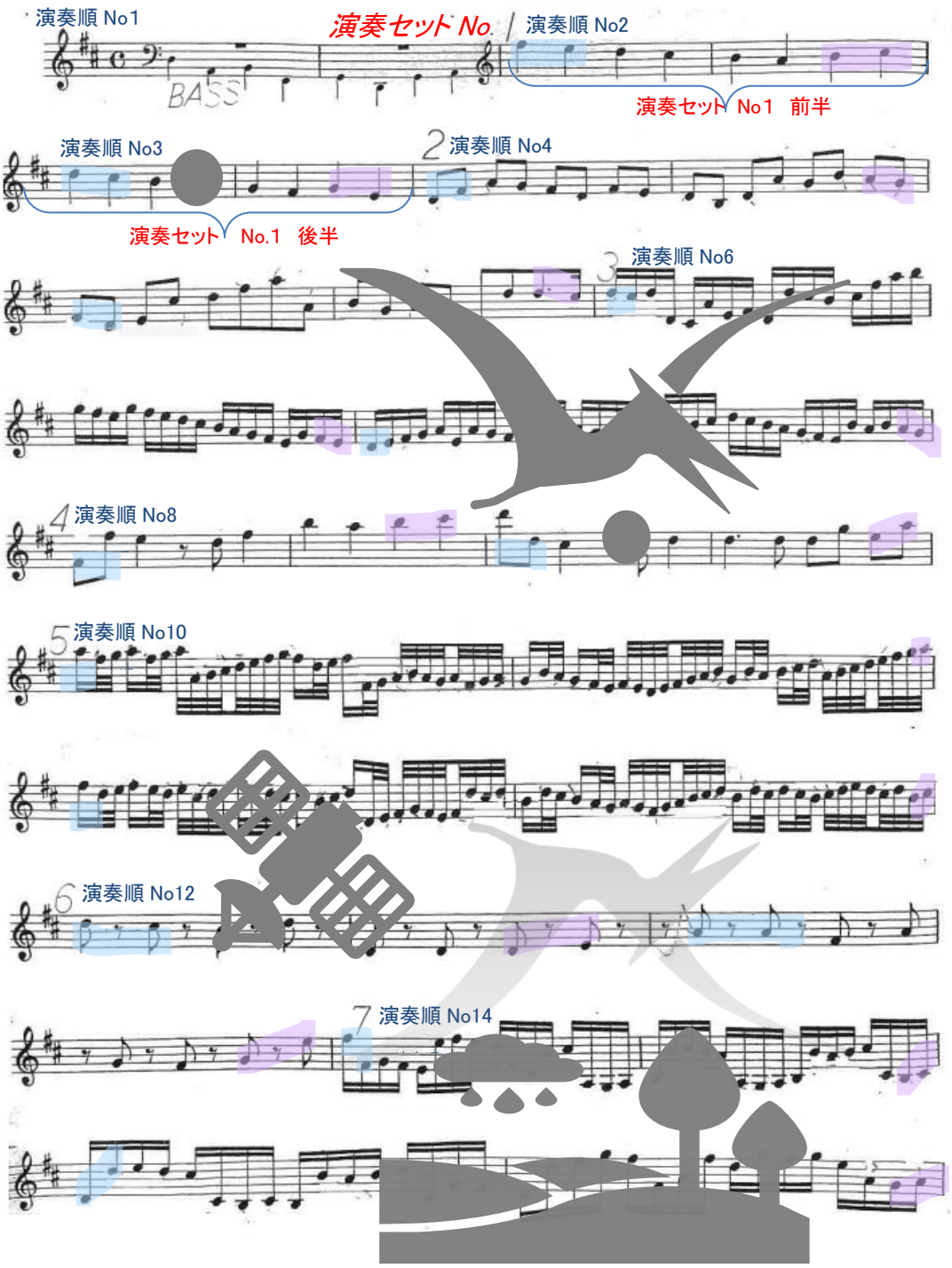


図１　　演奏セットＮｏ、演奏順Ｎｏ、チェック箇所

出だし２音　　最後２音


演奏順 No1
演奏セット No.1
演奏順 No2
BASS
演奏セット No1　前半
演奏順 No3
2 演奏順 No4
演奏セット No.1　後半
3 演奏順 No6
4 演奏順 No8
5 演奏順 No10
6 演奏順 No12
7 演奏順 No14

未来世界仕様書は文芸雑誌です
お気づきの点がありましたら下記までお知らせください

未来世界仕様書　Vol.27 ver.1.0
発行:丘乃恵
2023年11月11日
Mail: mgz.fwspec@gmail.com
Twitter:@OkaNoMegumi